見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち

November 2026 vol.151



◆佛現寺（ぶつげんじ）

所在地：静岡県伊東市物見が丘
交　通：JR 伊東線「伊東」駅 南東 約 2km

相模湾から房総半島沖にかけてのびる相模トラフでは、過去に繰り返し大きな地震が発生し、静岡県の東部から関東地方に大きな被害をもたらしてきました。大正 12(1923) 年の関東大震災（大正関東地震）では、地震に伴って発生した火災により、東京市本所区の被服廠跡で 4 万人近くが亡くなるなど、10 万人を超える死者が発生しています。そのひとつ前の M8 クラスの地震、元禄 16(1703) 年 11 月 23 日の元禄（関東）地震も、大きな被害をもたらした地震です。

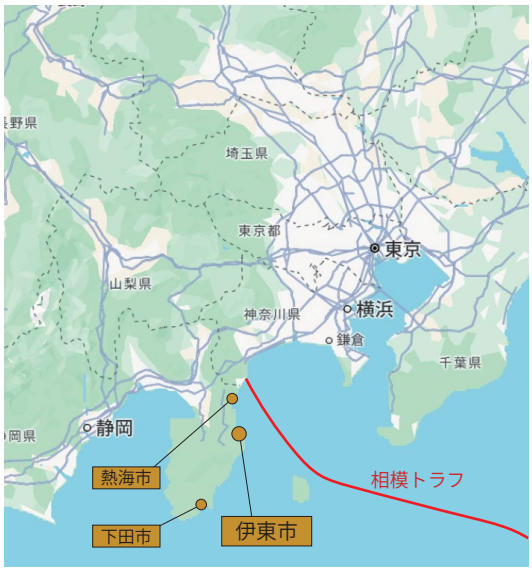
元禄地震では、相模湾から房総半島にかけての広い範囲で沿岸部に大きな津波が到達し、各地に被害がもたらされました。伊豆半島の東岸、熱海から下田にかけての地域も、元禄地震で津波による被害を受けた地域のひとつです。

当時の熱海市から伊東市のあたりは、小田原藩伊豆国領で、元禄地震では 476 軒の潰家と 639 名の死者が発生したとされ、伊豆半島の被害は、ほぼこの地域に集中しています。伊豆国領における潰家一軒あたりの死者数は 1.34 人で、小田原藩相模国領（小田原市や秦野市など）の 0.081 人、駿河国領（御殿場市や富士市など）の 0.043 人と比較すると、非常に高い値となっています。明治三陸地震津波の宮城・岩手・青森の 3 県ではこの値が 3.1 人で、伊豆国領では津波による犠牲者が非常に多かったことを示しています。

伊東市には、こうした被害を物語るように、各地に津波の到達や河川沿上による浸水の記録が残されています。伊東市中心街の南西、大川の中流域に位置する旧鎌田村には、かつて、津波地蔵と呼ばれた石塔がありました。元禄地震による津波の到達点に建てられたとされるこの津波地蔵があった場所には、現在、地元の人々によって建てられた「元禄十六年大津波祈震災犠牲者の冥福」と記された石碑があります。この場所の地盤高さは 17.3m で、元禄地震ではこの高さまで浸水したものと推定されています。また、石碑の前の通りは「よこまくり」と呼ばれており、これは「津波に追いつかれて人が倒れた」場所を意味するとされ、地元の史料にも「この地点まで津波がきたのではないかと思われる」と記されています。この他、石碑の北東に位置する櫓ヶ淵は、元禄地震の津波で船具が漂着した場所とされ、その地盤高さから、浸水は 15.9m と推定されています。

伊東市中心街の海に近い旧湯川村、旧松原村、旧和田村は、いずれも標高が 3 ～ 6m 程度で、元禄地震の津波で壊滅的な被害を受けました。大川の南東側平野部にあたる旧和田村では、村の総人口 560 人の約 3 割にあたる 163 人が命を落としたとの記録が残されています。市役所にほど近い佛現寺には、2 基の元禄地震津波供養塔があります。1 基は境内にあったもの、もう 1 基は海岸近くにあったもので、いずれも元禄地震による犠牲者を供養するために建てられたものです。碑文からは、犠牲者への慰霊の気持ちとともに、震災の教訓を後世に伝えようとした、当時の人々の思いも読み取ることができます。


元禄地震津波供養塔
（手前 2 基、後ろは関東大震災供養塔）
（国土地理院 HP より）





◆災害にまつわる碑や史跡には、実際にその地域で起こったことが記録されているだけでなく、当時の人たちの思い（二度と被害を繰り返さないように、など）が込められています。碑や史跡の前では、災害が実際にこの地域で起こるということを実感していただくとともに、そうした先人たちの声に耳を傾け思いを巡らせ、身の回りの備えにつなげ、これからの防災に活かしてください。

◆見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち バックナンバーから

● 津波之碑（三浦津波碑）(vol.116,2023.12)

所在地：三重県北牟婁郡紀北町三浦
交　通：JR 紀勢本線「三野瀬」駅 南 約 500m

三重県の志摩半島や熊野灘沿岸は地形的に津波の影響を受けやすく、明応 7(1498) 年明応地震では志摩で 10 ～ 15m、宝永 4(1707) 年宝永地震では伊勢の大湊で 8 ～ 15m、嘉永 7(1854) 年安政地震では志摩で 6 ～ 18m の津波が襲来するなど、繰り返し大きな被害が発生してきました。

昭和 19(1944) 年 12 月 7 日に発生した昭和東南海地震も、大きな津波が襲った地震のひとつです。昭和東南海地震による津波は、熊野灘沿岸には 10 ～ 20 分で到達し、その高さは、最も高かった尾鷲では 8 ～ 10m に上り、熊野灘沿岸では 5 ～ 8m 程度の津波が到達しました。三重県の被害は、津波によるものが大半で、中でも現在の北牟婁郡は県内最大の津波被害地域となり、郡全体で 209 名の死者が発生したとする記録もあります。

現在の紀北町の中心、紀伊長島から少し西にあった三野瀬村も津波が襲った場所のひとつで、村の住家の被害率は 31% に上り、三重県では 4 番目の高さとなっています。三野瀬村の津波の高さは 3 ～ 5m 程度とされていますが、25 戸が全壊、56 戸が流失し、3 名の尊い命が失われました。

旧三野瀬村の三浦漁港の近く、三浦漁民センター横の堤防脇には、紀北町で唯一の昭和東南海地震の慰霊碑、津波之碑があります。碑は、昭和 28(1953) 年 7 月に、当時の区役員たちの努力により、後世に災害の実相を残すことを願って建立されたもので、被害の様子とともに、津波は繰り返し発生すること、子孫のために防潮堤の建設に尽力したことが記されています。


津波之碑
（国土地理院 HP より）

◆詳細は、見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち vol.116（https://www.gensai.nagoya-u.ac.jp/rekishijishin/geppo.html）をご覧ください。

★ 尻つみ祭り

尻つみ祭りは、伊東市の音無神社で毎年 11 月 10 日に行われる、天下の奇祭と伝統行事です。源頼朝と八重姫が音無神社で密かに逢瀬を重ねたという伝説に由来し、暗い社殿の中で行われる神事では、お神酒の盃を回す際にお尻をつねって合図したことから、尻つみ祭りと呼ばれるようになりました。

現在では、この由来にちなみ尻相撲大会が祭りの名物になっています。参加者は直径約 1m のたらいを土俵に、お囃子のリズムに合わせてお尻をぶつけ合い、相手を押し出した方が勝ちとなります。子どもの部、大人の部、団体の部があり、真剣勝負ながら観客の笑いを誘うユーモラスな催しとして親しまれています。当日は神事や奉納太鼓も行われ、地域の伝統文化を伝える重要な行事となっています。


伊豆・伊東観光ガイド HP より

～鉄道で巡る～

伊豆急行線は、伊東駅と伊豆急下田駅を 16 駅で結ぶ全長 45.7km の鉄道路線で、伊豆半島東海岸の観光や地域交通を支える重要な路線となっています。


Photo AC より

車窓からは相模灘や伊豆七島を望み、片瀬白田駅から伊豆稲取駅付近は絶景区間として知られます。観光列車「リゾート 21」や特急「踊り子」なども運行され、首都圏から多くの観光客が訪れます。

●ブレイクタイム●

♪ 伊東温泉

伊東温泉は伊豆半島を代表する温泉地で、平安時代にはすでに存在していたとされ、江戸時代には三代将軍・徳川家光に湯治湯として献上された記録も残っています。湯量が豊富で、源泉数は 750 本を超え、1 分間に約 32 トンもの温泉が湧き出しており、刺激の少ない泉質から幅広い世代に親しまれています。温泉街には、伊東温泉観光・文化施設 東海館を始め、歴史的建造物が点在し、情緒ある街並みを楽しめます。相模湾に面し新鮮な海の幸が豊富で、金目鯛や地魚料理も大きな魅力です。


photo AC より

◆ この地域の災害に関する碑・史跡、資料・体験談集、地域に残る古文書、研究資料、郷土史研究者・団体などの情報がありましたら、gensaisan2014@gmail.com まで情報をお寄せください。

◆ この地域の歴史災害記録をオンラインツアー形式、マップ形式で紹介しています。各地の碑や史跡等にご興味をお持ちいただけましたら、『災と Seeing』のホームページ（https://www.saitoseeing2020.jp/）をぜひご覧ください。

（発行：減斎の会・名古屋大学減災連携研究センター　2026 年 11 月）